
炭酸水

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炭酸水

【Nコード】

N49980

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

暑い暑い夏休み。

DVD1枚持って、彼女がうちにやって来た。

思春期の男である僕は、どうするのが正解ですか？

前編（前書き）

「求める者。」の続編です。

なので、登場人物の説明がありません。 m (|) m

養生人物が、彼氏・彼女の関係になってる以外、
前回から引き継いでるものなんてありませんが・・・

前編

今年は暑い。

強い日差しが照りつけ、陽炎が道に揺蕩う。

蝉達が壮大に鳴き、暑い空気を振るわせる。

毎年暑いと思うが、特に今年はそう思う。

そんな夏休みのある日。

一人での昼食の後片付けも済み、自室で雑誌を広げていると、チャイムが鳴った。

「こんな暑い日には、外に出たくない。」

予告もなく、僕の家に来た葵姉は、

自分の家からここまで、しっかり外を歩いて来たはずだが、

言葉とは裏腹に、笑顔で、

「美晴から、薦められたんだけど、映画見ない？」

そう言っつて、透明なケースに入ったDVDをヒラヒラさせた。

ターコイズグリーンののタンクトップの下に、

ベビーピンクのホルターネックのタンクトップが覗く。

下も、クロップ丈の黒のジーンズに、ビーズで飾られたサンダル。

手には、例のDVDを一枚だけ、

もちろん日傘など無い。

日焼けなんて、頭に無いかのような格好だ。

お邪魔しまゝす、と声をかけ上がって来る。

「涼しいのは、リビング？ 聡太の部屋？」

「・・・僕の部屋。」

勝手知つたる余所の家・・・と、言う所か、
迷いも無くスタスタと、僕の部屋に向かう。

「あ、飲み物、何かちょうだい。」

そう、一言残して。
行ってしまった方向をしばらく見つめ、
溜息を一つ溢した。

台所に向かい、冷蔵庫を開ける。

1本のペットボトルを取り出そうとすると、

近所のケーキ屋の箱が目に入った。

妹が買ったものだろうか？

中身が気になって出してみると、

箱の上には、メモが貼り付けてあり。

好きに食べていいよ

りさ

珍しい事もあるものだ。

箱を開けると、シュークリームが2つ。

パリパリの皮に粉砂糖で化粧され、

ぱっくりと割れた口には、カスタードと、生クリーム。

そして、半分に切られたイチゴと、ブルーベリーが2つ載っていた。

1つ360円のやつだな、

・・・少し、出来過ぎの感が否めないが、

ありがたく、後で頂く事にしよう。

とりあえずは、冷蔵庫から出した、ペットボトルを1つと、

グラスを2つトレイに乗せ、自室に向った。

「はい、飲み物お待ち。」

「ありがとうー!!」

笑顔で迎えた人は、僕のベットに転がっていた。

一瞬、僕は顔が引きつったかもしれない。

「あれ？ 理佐ちゃんは？」
「友達と図書館。自由研究の資料探しだつて言った。」
「ふーん、頑張るね。」
「そっちこそ、受験勉強は？」
「ん〜、今はそんな言葉聞きたくない！」
両耳を手で塞いでじたばたしている。
・・・そんなに布団蹴らないで下さい。

溜息を一つ吐き、ペットボトルに手を伸ばす。
キャップを捻ると、ぷしゅっ、と炭酸飲料特有の
小気味良い音が響いた。
シユワーという細かな音を立てて、グラスに注ぐ。
2つ目のグラスに注いでいると、
いつの間にかベットから降りたのか、横から手が伸びる。
その手は、グラスを掴むと引っ込み、すぐさま
「うぐっ」
という声がした。

驚いて、声のした方を見ると、
葵姉は、眉間に皺を寄せ、複雑な顔をして立っていた。

「・・・甘くない。」
一瞬、何を言っているのかわからなかったが、
とある仮説を思い描くと、笑いがこみ上げてきた。
その仮説は当たつたらしく、恥ずかしさを誤魔化すように、
声を荒げて、持論を展開してくれた。

「な、何よ！ 炭酸つていつたら甘いものでしょ!？」
「ジュースの炭酸飲料水ならね、でもこれは、ガス入りのミネラル
ウォーターなんだ。」

宥めるように言い、ペットボトルを渡すと、ばつの悪そうな顔で、
穴でも開きそうなほどに、まじまじと眺める。

「へー、ライム風味？」

「うん。お気に入りであったんだけど、最近見かけなくってさ、こないだ久しぶりに見つけたからまとめて買ってみた。」

「ふん、これ好きなの？」

ペットボトルをテーブルに置き、こちらを見ながら言う。

「炭酸時々欲しくなる時ってない？」

「あるけど……。」

「でも、結構甘ったるいし、どれだけ糖分が入ってるかを考えると飲めないっていうか……。」

「……糖分。」

「こないだテレビで、どの飲み物にどれだけ砂糖が入ってるか、とかやっててさ……凄かった。」

「……凄いな。」

「でも、これだと平気でしょ？ ただの炭酸入りより、ライムでさっぱりしてて飲み易いし。」

「……そっか。」

葵姉は、何かに何得したように、そう呟いて、グラスを口に運ぶ。

「そう言われればそうね、ライムが爽やかな感じ？」

「ぶっ、単純？」

「なっ、本当にそう思うのっ！ さっきは、予想と違って脳が騙されたのー！」

「はいはい。」

「そっ、適当に返事しない！」

「どうやら、収まらないようなので、話題をずらしてみる。」

「でもさ、本当に最近レモンのしか無いんだよね。」

「へ？」

「期間限定とかだったのかな？ どっかで見かけたら教えて。」

「あ、ああうん、わかった。」

「じゃ、持ってきてくれたDVD見てみようか？」

前編（後書き）

前中後の、前編です。

中編（前書き）

続きです。

中編

『Fin』の文字と共に黒く暗転し、美しいピアノの音が流れる。そして、下から上へと、流れて行くアルファベットの文字列。

僕はそれを、ただ眺めていた。

二人とも無言だった。

何も言えなかった。

いや、話す言葉が見つからない。

隣に座る葵姉を、伺い見る事も出来ない。

正直、この映画がどんなストーリーだったのか、頭に残っていない。映画に詳しい訳でもない僕は、世間の評価も知らない。

今、僕の頭に残っているのは、ベットで睦みあう男女の姿。

途中で停止させるのも恥ずかしく、動く事も出来ず。

映画は終わり、今に至る。

エンドロールも終わり、タイトルメニューに戻った頃、

・・・咳払いを一つ。

緊張で喉が強張り、声が出なかった。

「美晴さんからって・・・言ってたよね？」

「・・・うん。」

念の為確認して、改めて思う。

あの人は、悪魔だ。

透明なケースに、ホワイトレーベルのDVD。

表面には、何も書かれていない。

油断した・・・思いつきり畏に引っかけた気分だ。

彼女の、人の悪い笑みを浮かべた顔が思い浮かぶ。

針のむしろにでも座っているような気分していると、

葵姉が、口を開いた。

「刺激的な内容だったね。」

「う、うん。」

オブラートに包まれたような、見事な言葉の選択だね。

「でも、いいな・・・」

「えっ？」

ごめんなさい、僕はどんな話だったのか、記憶に無いです。

「お互いを思いやって、ストレートに思いを伝えて・・・」

「・・・」

そんな内容だったんだ。

「でも、最後に別れる事になっちゃったのは、ちょっと嫌かな。」

「・・・」

そういえば、駅で別れるシーンが会った気がする。

「やっぱり、ハッピーエンドの方が、よかつた〜って気分になれていいかな。」

少し涙目で、微笑んでいる葵姉の顔を見ると、

映画の内容を覚えてないなんて、どうでもよくなってきた。

「でもさ、死別じゃないから、このラストの後は、どうなるかわからないよ。」

「え？」

「この映画の彼はわかんないけど、好きなら、手に入れたと思うし。」

離れなきゃいけなくなったら、絶対もう一度捕まえに行く。」

「・・・」

「出来れば、手放したくも、離れたくもないけどね。」

照れ隠しに、少し笑うと、

右側に、柔らかく暖かい感触を感じた。

「いいな、そういうの。」

目線が交錯し、お互い吸い寄せられるように、唇を重ねた。

「・・・所でさ、」

彼女は何？ と首をかしげる。

朱に染めた頬も、声も、仕草も可愛らしい。

「魅力的な彼女と一緒にいて……」

「ん？」

「刺激的な映画を見てさ……」

何を思い出したのか、頬の朱が増す。

顔を見ながらでは恥ずかしいので、彼女を抱き寄せて耳元で囁く。

「……この状況で、僕はどうしたらいいのかな？」

実は、本当に困ったので、素直に聞いてみただけなのだが、しばらくの沈黙の後。

「……好きにしていよいよ。」

最高の返事が返ってきた。

「本当に？」

「……女の子に、これ以上言わせるな。」

そう言つて、頬を抓られた。

遠慮もなく、思いつきり。

「ひてっ、ひやめてっ……つうっつ、」

もう、いい雰囲気も何もあったものじゃないので、

ひりひりと痛む頬をさすりながら、慚然として伝えておく。

やっぱり色々と、敵わない気がするから。

「……先に宣言しておくけど、僕経験ないから、上手くいくかどうかかわからないよ？」

「ぶっ、あはははははっ。」

彼女は、腹立たしいほど大声で笑い転げた。

「……笑い過ぎ。」

「だって、正直者!？」

そっだよ、正直に言いました。

正直ついでに、更に情けない事まで呟く。

「見栄張って失敗でもしたら、立ち直れそうにないし……」

ぴたりと笑い声が止み、正面から見据えられた。

あまりにも真っ直ぐで、視線を逸らしたくなる。

でも、それは何か負けたようで、居た堪れない気分になりながらも耐える。

「あーもう、可愛いつー!!」

突然、力一杯抱き着かれた。

頭を抱かれていますので、顔は必然的に胸に押し付けられる。

柔らかくて、ドキドキする反面・・・

縫いぐるみか、抱き枕にでもなった気分なのは、気のせいだろうか？

なんか結局、今のお見通しなのかな？・・・

少し不本意で、結局年下で、そんな思いに囚われ眉根が寄る。

「・・・それ、男に向けて言う台詞？」

「いいの、女の子はそう思うものなの。」

「・・・そう？」

よくわからない。

「うん。・・・それに、」

腕の力が緩んだので、体を離す。

そして、再び正面から見詰め合う。

「経験あるって言われるより嬉しい。」

「・・・。」

「一緒に進も。」

そう微笑んだ彼女は、とても綺麗だった。

『一緒に』そう彼女は言った。

やっぱり、すごいや。

変な気負いや、後ろ向きな思い。

そんな事の全てを、ふんわりと受け止めてくれた気がした。

勝ち負けとか、どうでもいい、

彼女に、こんなに惚れてる時点で、もう絶対に敵わないんだと思う。

そんな彼女を手に入れる事が出来る。

その幸運に感謝した。

中編（後書き）

あと、1話。

18禁にはなりませんので・・・。

後編

「体平気？」

「……うん。」

「……よかった。」

その答えに、何だか色々とほっとした。

青かった空は、既に朱鷺色や赤紫が混じっていた。

そのままの度胸もないので、息が整うのも待たず、後始末をし、脱ぎ散らかした服を身に着ける。

一方、彼女はそのままの姿で、布団に包まっている。

背中に視線を感じるが、改めて顔を見るのは気恥ずかしい……気がする。

渴きを覚え、ぬるくなった水に目が留まる。

「何か、冷たいもの持ってくるね。」

良い口実を見つけ、台所に向かおうとすると、声がかかる。

妙にはつきりとした口調だった。

「もう1本、それある？ それちゃんと飲んでみたい。」

「……わかった。」

男の僕だって、色々と思う事がある、

まして、女の子の彼女は、もっと思う事がいっぱいあるはずだ。

そんな事を考えながら、グラスを洗い、広げた布巾の上に並べて置き、

食器棚から、別のグラスを出してトレイに置く。

そして、冷蔵庫を開けると、ケーキ屋の箱が目に入った。

あー、シュークリーム……。

背中に暑さの為ではない、嫌な汗が伝う……まさか。

部屋に戻ると、彼女は服を着てベッドに座っていた。目は、ずっとメニュー画面を映したままのテレビに向いている。違和感を感じた。

先程までの雰囲気とは違う。

さつきは、何かを噛み締めるような、改めて認識するような、しいていえば、前向きな事を考えている感じだったのだが、今は、取り返しのつかない事をしてしまった時ような、そんな感じがする。

途端に心配になり、トレイをテーブルに置き、隣に座って尋ねた。

「どしたの？」

んー、と言いよんだ後、しびしびながらに答える

「・・・美晴にね、感想よろしくって渡されたの・・・このDVD。」

「・・・あー」

脱力した。

のろのろと立ち上がり、下に座り直す。

「見事に嵌められたって事かな？」

「・・・たぶん、そうだと思うよ。はい、これも食べよ。」

ケーキ屋の箱を開けて示す。

「シュークリーム？」

「たぶん、これも小道具だと思う。」

言いようのない妙な空気に支配される。

彼女は目を閉じて、呟いた。

「感想も・・・映画のじゃないよね？」

「・・・だろうね。」

仕掛けられた畏に、自ら嵌った自覚はあったものの、見事な計算と、見事に踊らされた自分達に呆れる。

まったく恐ろしい。

方々に糸を展開させ、中央で優雅に座し待つ。

そんな蜘蛛のビジョンが浮かぶ。

そんな事を考えていると、

「・・・それとさ、途中で気付いて少し心配になったんだけど・・・でも、用意周到？」

少し、顔を赤らめて目を逸らしながら聞いてきた。

あーそこですか？

やっぱりそう思うよね、突然の展開で準備なんてしてないし、してたらしてたで、あれだし・・・

夏休み前の出来事が、頭を過ぎる。

彼女の弟に、色々と感謝している事を伝えるのには、少し抵抗があるので、

ここは誤魔化す事にしよう。

「お守りのご利益があつたって事かな。」

「お守り？」

「無理やり渡されたものだけど、見事に願いが叶ったみたい。」
不思議そうな顔をしているが、

「まあ、共通の知人ってやつかな？ 美晴さんじゃなくて。」

「・・・誰だろ？」

本気で考え込んでいる。

知人と言ったので、弟とは思わないだろう。

「それより、せっかく持ってきたんだから飲もうよ、また温くなるし。」

特に返事も待たず、ペットボトルに手を伸ばす。

キャップを捻ると、ぷしゅっ、と炭酸飲料特有の小気味良い音が響いた。

シューワーという細かな音を立てて、グラスに注ぐ。

両方のコップに注ぎ終わると。

お互いグラスに手を伸ばし、口に運ぶ。

「あのね、」

「ん？」

「これ美味しい。」

「甘くないけど？」

「・・・いいの。」

たぶん、同じ事を考えている。

・・・きつと、忘れられない思い出の味になりそつだ。

後編（後書き）

終わりです。

なんか、色々といじめた感じですよ。

出て来ない美晴さんが、色々と仕組んでいます。

あと、聡太の台詞は私の台詞です。

クリスタルガイザーのライム風味って、どこいったんですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4998o/>

炭酸水

2010年10月31日01時08分発行